

私は子供の頃、勉強が大嫌いだった。机に向かって姿勢よく座り、静かに考える、その行為が退屈で仕方なかった。

それは国語に関しても同様だった。国語科の教師を目指したのも、多くの人とコミュニケーションをとることができる「先生」という職業に就くためであり、国語の魅力を伝えたかったわけではない。国語はただ得意なだけであった。そのため、私は国語に対して特別な思い入れもなく教師として教壇に立つことになったのだった。初めての授業は二年生だった。当時は教えることに必死で生徒の発言や表情には目もくれずに、ただただ淡々と押さえるべき点を押さえるように授業をしていた。生徒の立場からすると、何の発見もなければ何の達成感もない、教師の自己満足に過ぎない授業だったと、今になって思う。

そんな授業を繰り返していくうちに「国語は面白くない」という発言をする生徒が現れ始めた。一年目の私はそんな生徒たちに国語の魅力を語ることも、また魅力を感じさせることもできないでいた。当たり前だ、教師自身が「面白くない」と思う授業を誰が面白がるのだろう。授業で教えていることは間違っていないのに、という何とも言えない悔しさは私の中にじんわりと残り続けた。

私にできること、私が生徒たちに教えてあげられることとは何か、答えが出ないまま二年目となり、三年生の授業を担当することになった。当然、二年生の内容と比べて、より複雑な内容になっており、教材の持つどの面をどのように扱うかが重要になってくる。教科書を広げたまま頭を抱えることもしばしばだった。そんな中ある一つの考え方に至った。それは「自分が生徒の立場だったら」というものである。教師と

しての考えにしてはごく普通のことではあるが、中学時代に勉強が大嫌いだった私だからこそ、より生徒たちに寄り添えるのではないかと考えた。「自分が好きだったものは何だろう?」「どんな授業を楽しんでいると感じ、積極的に考えているのだろうか?」そんなことを思い出してみた。私は「意外性」が大好きだった。思わず「え?」「なんで?」「そうなん?」という声が出るような意外な展開に対して興味を持つことが多かった。

そこから私は授業の中に「裏切りの展開」を取り入れることにした。それは生徒たちの思考がある程度固まった段階でそれが覆ってしまうような発問をすることだ。そこで出てくる「なんで?」「どういうこと?」という声こそが、生徒の思考が深まっていくときの素の反応であると私は感じている。生徒の中の「簡単な当たり前のこと」を崩すことによって思考が揺らぎ、話し合いながらみんなで頭を抱える。一見すると授業の正解とは程遠いかもしれない状況ではあるが、そこには笑顔があり、難しい問いに対して挑むことに楽しみを感じている様子があった。

それから私自身も教材研究を楽しめるようになった。文中の表現の細かなところに疑問を抱き、機会があれば他の国語科の先生方と見解を述べ合う。時には生徒の発言から着想を得て、授業に組み込むこともある。私はここで自分なりの教材への向き合い方を見つけることが出来た。

これからも教員生活が長く続くが、私自身が常に考えを更新し、多くの生徒が楽しみながら考えを深められる授業を作っていきたい。そして国語が持つ魅力を伝え、勉強嫌いの生徒も「国語が楽しい」と思えるように目指していきたい。